

成都における陸游と范成大の交流

三野豊浩

はじめに

陸游(一一二五—二〇九)と范成大(一一二六—一一六九)は共に南宋を代表する大詩人であり、また篤い友情で結ばれていた。二人が最も密度の高い交流を持ったのは、成都で共に過ごした淳熙二年六月から淳熙四年六月までの約二年間であり、この時期に多くの詩文の應酬が集中して行われている。この小論では、成都における范陸の交流を二人の残した詩文をはじめとする各種の資料によって再構築し、その友情のあり方について考察する。

一

陸游と范成大が初めて出会ったのは、二人が四十歳になる少し前、高宗の治世の末年にあたる紹興三十二年(一一六二)、南宋の都臨安(浙江省杭州市)でのことである。二人はごく短期間ながら、編類聖政所檢討官として同僚の関係にもあった。隆興元年(一一六三)、新帝孝宗寵愛の側近を彈劾したことが原因で、陸游は鎮江府(江蘇省鎮江市)への左遷を命じられる。陸游は赴任の前に一旦歸郷するが、その送別の際に范成大は五律「送陸務觀編修監鎮江郡齋會稽待闕」二首(石湖九)を書いて陸游に贈っている。これは二人の友誼を表現した現存す

成都における陸游と范成大的交流

る最初の作品であり、

高興餘飛動 高興 飛動を餘し

孤忠有照臨 孤忠 照臨有らん (其二)

功名袖中手 功名 袖中の手なるも

世事巧相違 世事巧みに相違う (其二)

などの詩句からは、范成大が國情を憂慮する陸游の心情に理解を示し、その不遇に同情を寄せていたことが伺える。

その七年後の乾道六年(一一七〇)閏五月、范成大は孝宗の命を奉じ華北を支配する金朝へ使者として赴くことになる。目的は、金に占領されている宋の皇帝の陵墓の返還と、金の國書を宋の皇帝が受け取る際の儀禮の改善という二つの難題の交渉にあたることである。同じ頃、陸游は新たに夔州(四川省奉節縣)通判の任に着くべく、家族を引き連れて故郷の山陰(浙江省紹興市)を出發していた。陸游の『入蜀記』によれば、六月二十八日に二人は鎮江の金山でつかの間の再會を果たしている。陸游の記述はごく簡潔な事實の記録にとどまり、またこの時應酬された詩なども残っていないため、相互の印象がいかなるものであったかは、伺い知ることができない。しかし片や資政殿大學士の肩書の上に金國祈請使という大任を帯び、片や窮迫の末の僻遠

の地への仕官である。かつて對等の付き合いをした二人の地位はこの時點ではすでに大きく隔たっていたのであり、それぞれの心中には複雑な思いも去來したことだろう。二人が成都で再會するまでに、それから更に五年の歳月が流れる。

陸游は、乾道六年冬に任地の夔州に到着して以來、淳熙五年（一一七八）春に臨安に召喚されるまでの足掛け九年を、一貫して蜀地で過ごす。故郷の風土とはきわめて異質な蜀での生活は、陸游の精神に大きな刺激を與え、創作活動に新しい展望をもたらした。特に乾道八年（一一七二）三月から十月まで南鄭（陝西省漢中市）の王炎の幕府に身を置き、最前線の緊張を肌で感じることできた時期は、陸游の氣力の極めて充實した時期だった。六十八歳の時、陸游は當時を回想して、

四十從戎駐南鄭 四十 戎に従い 南鄭に駐す
 酣宴軍中夜連日 軍中に酣宴し 夜を日に連ぬ

（中略）

詩家三昧忽見前 詩家の三昧 忽ち前に見（あらわ）れ
 屈賈在眼元歷歷 屈賈 眼に在ること元より歴歷たり

（劍南二五「九月一日夜、讀詩稿有感、走筆作歌」）

と詠い、南鄭での從軍體驗が自身の詩の發展の契機となったことを述懐している。前線の司令部が解散し、成都府安撫使司參議官として成都に着任した陸游は、その後蜀州（四川省崇慶縣・嘉州（同樂山市）・榮州（同榮縣）といった成都周邊の小都市の知事代行などの臨時職を轉々とし、淳熙元年（一一七四）の冬には榮州にあった。一方、廣西經略安撫使として靜江府（廣西省桂林市）に赴任していた范成大が新しく四川制置使兼成都府知事に任命されたのは、同年十月のことである。范成大は自分の出發の前に、榮州にいる舊知の陸游を自分の幕

府の參議官とする手筈を整えていた。除夜に成都赴任の指令を受けた陸游は、翌淳熙二年（一一七五）正月十日に榮州を出發している。少し遅れて正月二十八日に靜江府を發つた范成大は、四カ月を越える長旅の末、六月七日に成都に到着する。時に陸游五十一歳、范成大五十五歳である。この時の再會を記念する詩は、やはり残されていない。

二

『宋史』地理志五によれば、當時の成都府路は淳熙二年には戶數二五八萬・口數七四二萬を數える大規模なものであった。成都府の人口については、北宋末の徽宗の崇寧年間（一一〇一～一一〇六）に口數五八萬九三〇であったと地理志に記されていることから、靖康の變以來の北方からの大量の人口移入を考慮するなら、陸游の當時には一〇〇萬に近い人口を擁する一大商業都市だったろうと歐小牧氏は推測している。經濟の發達した繁華な大都會は、安い俸給での田舎回りで鬱屈していた陸游の精神に新鮮な刺激と開放感を與えたことだろう。何より范成大の知遇は、生活の安定の上でも平素の政治主張の實現の上でも、陸游に大きな希望を與えたに違いない。八十一歳の時、陸游は成都時代を回想して、

階階過錦城 階階として錦城に過（よぎ）り
 邂逅客嚴武 邂逅して嚴武に客たり

（劍南六一「雜感五首、以『不愛入州府』爲韻」其五）

と詠っている。「階階」は、失意困窮のさま。成都は詩聖杜甫流寓の地であり、ここで陸游は太守の范成大を劍南節度使の嚴武に、自身を嚴武の幕府に身を寄せた杜甫になぞらえているのである。陸游が自己との境遇の類似から杜甫に格別の親近感を抱き、これを我が身に引き

付けて解釋していたことは、前野直彬氏の論文「陸游の目に映じた杜甫」に詳しいが、ここで陸が范を嚴武にたとえていることは意味深長である。一義的には、それは范成大が困窮していた陸游を温かく迎え入れたことを言うものだろう。しかし『新唐書』杜甫傳によれば、嚴武は親の代からの付き合いにより杜甫を厚遇したが、杜甫は「性褊躁傲誕」(怒りっぽく傲慢)であり、かえって嚴武に無禮を働き、その恨みを買うことがあったという。陸游がここでそうした側面も含めて范成大を自分にとつての嚴武と表現しているか否かは、即断できない。しかし『宋史』陸游傳は、成都における范陸の交流について、

范成大帥蜀、游爲參議官。以文字交、不拘禮法。

范成大蜀に帥たり、游參議官と爲る。文字を以て交わり、禮法に拘らず。

と總括している。二人の交際は舊友ならではのどつくばらんものだったろうが、後述するように、陸游も傍若無人な言動によって范成大との間に摩擦を生じる結果となっている。范陸の別け隔てのない付き合いは、二人の地位の隔絶ゆえに一面できわめて緊張をはらんだ関係でもあったことを、「邂逅客嚴武」の一句は示唆するかのようである。なお筆者は、陸游が范成大の存在に言及する際いかなる人物を引き合いに出すかに二人の關係を解く手掛かりが隠されていると考えるので、以後も詩の典故にこだわりつつ論述を進めて行きたい。

ともあれ、長旅の疲れを癒す間もなく范成大は邊境の太守としての激務をこなして行く。陸游の書いた「范待制詩集序」(渭南一四)によれば、成都府は廣大な土地と莫大な人口を抱えており、仕事は他の都市の十倍はある。その上周邊には各種の異民族が生息し、北方には強大な敵國の金が控えているので、いつ不測の事態があつてもおかしく

成都における陸游と范成大の交流

ない。そこで幕府では日夜文書を作成し、その對應に追われていた。築州では、

偶落山城無事處 偶々(たまたま)落つ 山城 無事の處
暫還老子自由身 暫く還る 老子 自由の身

(劍南六「別築州」)

とのんびりした田舎暮らしを満喫していた陸游も、今や忙しく公務に精動しなければならなかった。范成大の文集にはこの時期に書かれた数々の公文書が残されており、その量からも太守の激務ぶりが伺われるが、それらの起草には下僚である陸游も關與していたのだろう。參議官は本來實質的な職務のない閑官だが、翌年三月に書かれた七言古詩「遊園覺乾明祥符三院至暮」(劍南七)には、「雖名閑官實不閑」「案上文檄高於山」などの句がある。幕府は猫の手も借りたい状況で、范成大の知遇に應えるべく、陸游も最初のうちは精力的に公務に取り組んでいたのだろう。淳熙二年の秋に書かれた七律「書懷」(劍南六)は、當時の生活を、

身留幕府還家少 身 幕府に留まりて 家に還ること少なく
眼亂文書把酒稀 眼 文書に亂れて 酒を把ること稀なり

と詠っている。將軍張浚による大規模な北伐が失敗に終わり、隆興二年(一一六四)に新しく金朝との和議が結ばれて以来、朝政は一貫して主和派に牛耳られていた。范成大は當時の國策に忠實な穩健なものであり、萬一に備えて軍備にも力を入れたが、ことさら周囲と事を構えることはせず、人材の登用を積極的に推進し、内政の充實に努めた。その結果、着任以來幾月もしないうちに范成大の聲望は四方に轟き渡り、秋の收穫も豊作だったと陸游は記している。

開邊吾豈敢 邊を開くは 吾れ豈に敢えてせんや

自治有餘巧 自ら治むるには 餘巧有り

(石湖一七「九月十九日衛散回、留大將及幕屬、飲清心堂」)

とは、そうした范の自負を物語る言葉である。この時、陸游もまた范成大の「幕屬」の一人として清心堂に連なっていたのだらう。しかしこの年にはまだ、范陸の一対一での交流を詠った作品は現れない。もちろん二人とも、書かれた詩のすべてが今日伝わっているわけではない。しかし、公務の多忙に加えて上司と部下というごく實際的な關係に束縛されていたために、再會を喜ぶ氣持ちがあつたにせよ、それをストレートに作品に表現することはお互い困難だったとも考えられる。

三

冬が過ぎて、淳熙三年(一一七六)春たけなわの二月に陸游が書いた二十句の七言古詩「錦亭」(劍南二)は、陸游が范成大との友誼を表現した現存する最初の作品である。ここで陸游は情熱的な筆致によって絢爛たる夜宴の情景を描寫し、太守范成大に對する信頼と詩人范成大に對する贊美を詠い上げている。

樂哉今從石湖公 樂しい哉 今 石湖公に従うは
 大度不計壘丞壘 大度にして 壘丞の壘なるを計らず
 夜宴新亭海棠底 夜宴 新亭 海棠の底
 紅雲倒吸玻璃鍾 紅雲 倒(さかしま)に吸う 玻璃の鍾

(中略)

遊人如雲環玉帳 遊人 雲のごとく 玉帳を環らし
 詩未落紙先傳唱 詩 未だ紙に落ちずして 先に傳え唱う
 此邦句律方一新 此の邦の句律 方に一新せん
 鳳閣舍人今有様 鳳閣の舍人 今に様有り

この詩の第四句には、廣陵(江蘇省揚州市)の芍薬と並んで天下に名高い蜀の海棠が詠われているが、春の成都はまさに「花の都」であった。とりどりの花が町中に咲き亂れ、享樂的な氣分をいやが上にも盛り上げてくれたことだらう。有名な「花時遍遊諸家園」(劍南六)の連作は、この春の作である。「鳳閣舍人」すなわち中書舍人は、唐代には文士にとって非常に名譽ある地位とされていた。ここで陸游は范成大を唐の詩人たちになぞらえつつ、その文才を讃えているのである。二人が何より文學の友人として固く結びついていたことは前掲『宋史』陸游傳に「以文字交」とあることから伺えるが、この春はそうした詩文の應酬の最初のピークだったと考えられる。陸游は范成大が桂林から入蜀する道中での詩をまとめた『西征小集』を出版する際にその序文「范待制詩集序」を書いているが、その中で、范の詩が成都で盛んにもはやされ、空前の流行を呈したことを述べている。公時從其屬及四方之賓客、飲酒賦詩。公素以詩名一代。故落紙墨未及燥、士女萬人已更傳誦、被之樂府絃歌。或題寫素屏團扇、更相贈遺。蓋自蜀置帥以來、未有也。

公時に其の屬及び四方の賓客を從え、酒を飲み詩を賦す。公素より詩を以て一代に名あり。故に紙に落として墨未だ燥くに及ばざるに、士女萬人已に更々(ごもごも)傳誦し、之に樂府絃歌を被る。或は素屏團扇に題寫し、更々相贈遺す。蓋し蜀の帥を置きてより以來、未だ有らざるなり。

これは范成大の詩集の序文なので陸游は自身のこととは謙遜して書かないが、別の資料によれば、二人が應酬した詩は争って人々に傳誦されたという。二人の大詩人を一度に迎えた成都が、豊かな物産にめぐまれた花の都、そして一層華やかな詩歌の都となった様子が目に浮か

ぶようである。また范成大は、このような盛大な宴會を催しては幕僚や賓客たちに振る舞うのが好きだったらしい。陸游は范成大没後の追悼の詩の一つでも、宴會の情景を夢に見たことを詠っているほどである。詩風からは端正さ・几帳面さを感じさせる范成大だが、生活には多分に派手好きで豪放磊落な一面があったと思われる。

さてここで注意したいのは、「樂哉今從石湖公、大度不計疊丞疊」の二句である。この部分を入谷仙介氏は、當時陸游が實際に耳が遠かったことを言うものと解釋されている。それを否定するわけではないが、「疊丞」の語は『漢書』黄覇傳に由来するものであり、筆者は典故によって付與される意味をより重く考えたい。黄覇は循吏に分類されているが、彼が潁川の太守だった時に下僚の許丞という者が難聴になった。そこで督郵が許丞をやめさせるよう進言したところ、黄覇は、

許丞は廉吏なり。老いたりと雖も、尙能拜起送迎。正頗重聽、何傷。

許丞は廉吏なり。老いたりと雖も、尙能く拜起送迎す。正に頗る重ねて聽かば、何をか傷まん。

と答えたという。陸游がここで太守の范成大を黄覇に、自身を許丞になぞらえているとすれば、ここには「私は許丞のような役立たずの部下ですが、閣下は黄覇のように寛大なお方ですから、どうか私をお見捨てにならないでくださいね」という含みがあると推測できる。年齢こそ近くとも、范陸の官位には今や大きな隔りがある。陸の范に對する氣安さは、他の若い幕僚たちにはきわめて無禮で不遜な態度と映っていたに違いない。加えて陸游は詩文の才こそ拔群であれ、事務處理能力に優れていたかどうかは疑わしい。一例として、「錦亭」と同じ頃に書かれた七律「春晚書懷」(劍南七)には「挂笏看山頗自奇」の句があるが、錢仲聯氏の『劍南詩稿校注』によれば、これは『世說新

成都における陸游と范成大の交流

語』簡傲篇の王子猷(王徽之)の故事によるものという。

王子猷作桓車騎參軍。桓謂王曰、「卿在府久。比當相料理」。初不答、直高視、以手版拄頰云、「西山朝來、致有爽氣」。

王子猷桓車騎の參軍と作る。桓王に謂いて曰く、「卿府に在ること久し。比(ころおい)當に相料理すべし」と。初め答えず、直ちに高視し、手版を以て頰を拄ちて云う。「西山朝來、致りて爽氣有り」と。

これは、車騎將軍桓冲の參軍となつて以來何もせずにはぶらぶらしていた王子猷が、桓に「そろそろ公務に精勤してもらえまいか」と言われたのに對し、どこ吹く風とばかりとんちんかんな返事をするという逸話である。陸游はこの頃には、繁雜な役所の事務にほとほと嫌氣がさしていたのではなからうか。もちろん東晋と南宋では社會の氣風も異なるし、陸游が實際に王子猷ほど怠惰で無能な役人だったとも考えにくいのだが、天眞爛漫で文人肌の陸游は結局において官吏としての適性を缺いていただろうし、そうした彼を取り巻く幕府の空氣は次第に險惡になつて行つたことが十分想像される。とすれば、「樂哉」云々は苦しい立場にあつた陸游が張つた免職の豫防線であり、范成大の好意にすぎない氣持の表現と解されよう。一見手放しの歡樂を詠うかのような「錦亭」には、實は當時の陸游の危機感がさりげなく投影されているのではなからうか。しかしやがて豫感も現實となる。

四

三月になつて、陸游は參議官の職を免ぜられる。上巳すなわち三月三日付の「范待制詩集序」末尾には陸游の參議官としての位階が記されているから、この時点で陸游はまだ范成大の下僚の地位にあつたと

判断できる。しかし七律「三月十六日作」(劍南七)の尾聯には、

功名墮甑誰能問 功名は墮甑のごとく 誰か能く問わん

羞作飢鷹夜擊舖 羞す 飢鷹の夜に舖を撃くを作すを

とあるのが注目される。「墮甑」の語は、市場で買った蒸籠を落として壊してしまったのに振り向かなかつたという後漢の孟敏の故事によるもので、普通「後悔しても無益な過失」の意味で用いられる。ところでこの逸話は『世説新語』黜免篇の劉峻注に引かれた『郭林宗別傳』に見えるもので、『世説新語』の本文はこれにちなんだ次のような逸話を載せている。

鄧竟陵免官後赴山陵、過見大司馬桓公。公問之曰、「卿何以更瘦」。

鄧曰、「有愧於叔達、不能不恨於破甑」。

鄧竟陵免官の後山陵に赴き、大司馬桓公に通り見ゆ。公之に問いて曰く、「卿何を以てか更に瘦せたる」と。鄧曰く、「叔達(孟敏の字)に愧ずる有り。破甑を恨まざる能はず」と。

ここで言う「破甑」は意味的に「墮甑」と同じであり、しかも明らかに鄧竟陵(鄧遐)の免職事件の比喩として用いられている。もし陸游がこの逸話を念頭に「功名墮甑誰能問」と詠っているとすれば、ここで陸は錯綜した典故により彼自身の免職を暗示していると考えられ、この詩が書かれた直前(三月三日以降十六日以前)が、免職の時期と大まかに推測されるのである。

ところで、この典故からはまた別の意味を読み取ることができよう。「晋書」鄧遐傳によれば、鄧遐は桓温幕下の勇將で、漢の高祖の家臣樊噲にたとえられたほどだった。しかし枋頭の役の敗戦で憤懣やる方ない桓温は、かえって鄧遐の勇猛果敢さを危険視し、これを罷免してしまつたという。陸游がもしここでひそかに自身を鄧遐に、范成

大を桓温にたとえているとすれば、ここには「これまでお主のために身を粉にして來たのに、このしうちは何事か」と、罷免されたことで范を恨めしく思う氣持がそれとなく込められているとも考えられる。

免職の具體的な理由は想像によらざるを得ないが、前掲『宋史』陸游傳の記事などから推測して、陸游のあまりに放埒な言動に一因がある可能性が強い。典型的な例として、『劍南詩稿』では「三月十六日作」の三首前に置かれていることから免職直前の作と考えられる七絶「題直舍壁」(劍南七)は、次のように詠う。

文書那得廢哦詩 文書 那んぞ詩を哦るを廢するを得ん

羞作群兒了事痴 羞す 群兒の了事の痴を作すを

付與後人評此翁 後人に付與して 此の翁を評せしむれば

一丘一壑過元規 一丘一壑 元規に過ぎたり

これは「詩人陸游」の一大デモンストレーションである。まず第一句では「文書に埋没して詩をうなるのをやめることなどどうしてできようか」と詠う。次いで何かと批判がましい若い幕僚たちを「群兒」小僧ども」と呼び、「晋書」傅咸傳に楊濟の言葉として「馬鹿息子を生んでも役人仕事は勤まる」というが、役人仕事も簡單ではない。きちんと勤め上げたら本當に馬鹿になつてしまふが、それもまた楽しいものだ」とあるのをふまえ、公務に精を出す行爲を愚行として冷笑する。これは公然たるサポータージュの宣言と言えよう。一層不穩なのは後半の二句であり、「一丘一壑」の語には『世説新語』品藻篇の典故が用いられている。

明帝問謝鯤、「君自謂何如庾亮」。答曰、「端委廟堂、使百僚準則、臣不如亮。一丘一壑、自謂過之」。

明帝謝鯤に問う。「君自ら謂えらく、庾亮と何如」と。答えて曰

く、「廟堂を端委ならしめ、百僚をして準則ならしむるは、臣亮に如かず。一丘一壑は、自ら謂えらく之に過ぎたり」と。

つまり謝鯤は、朝廷にあって百官をうまく統率することでは自分分は庾亮に及ばないが、山水に親しむ情趣の點では彼に勝つていと言うのである。「此翁」は陸游自身を指すだろうから、ここで陸が自身を謝鯤に、范を庾亮（元規は庾亮の字）にたとえていることは明白である。とすればこれは、「范成大は確かに立派な太守かも知れぬが、後世の人間は詩人として自分をより高く評價するだろうよ」と遠回しに言っていることになる。しかも陸游はこの詩を官舎の壁に大書したわけ、これは明らかに常識的な官吏の規範から大きく逸脱した行爲である。范成大も、これには相當氣を悪くしただろう。だが陸游は陸游で、公務に追われながらもそれに埋没させることのできない詩人としての自己の存在を痛感し、激しいジレンマに陥っていたのだと思われる。それにいくら「不拘禮法」と言っても、上司と部下という枠組みを根本から除去することはできない。優れた詩人としての自負がありながら、公務では何かと范成大的な顔色を伺わねばならないことも、窮屈だったに違いない。「題直合壁」が免職決定の引き金となったかどうかはわからないが、これは陸游の内心の葛藤がこの時すでに限界に達していたことの表白と受け取れよう。

また陸游にしてみれば、四川制置使として強大な軍事権を掌握している范成大には、北方の失地回復という自己の悲願の實現の上で大いに期待する所があったはずである。しかし范成大は文學の友人として陸游を尊重したものの自ら軍事行動を起こすには消極的であり、そうした姿勢が陸游を失望させ、その主戦論を一層過熱させたことも十分考えられる。范は舊友として陸の心情や性格を熟知していただろう

成都における陸游と范成大的交流

が、今では邊境の太守として重責を擔う立場となり、公私混同は許されない。もし陸游の言動に自己の幕府の運営に支障を來すほどのものがあれば、周囲の批判を黙殺してまでこれを幕府に留め置くわけにはいかなかったろう。

いずれにせよ免職は、生活基盤の喪失という點で大きな打撃には違いない。『入蜀記』九月二十八日の項は、招頭（船頭の長）の職を失った王百一という者が發狂して川に身を投げたことを記した後で、

一 招頭得喪、能使人至死。況大于此者乎。

一 招頭すら喪を得れば、能く人をして死に至らしむ。況んや此れより大なる者をや。

と述べている。入蜀以前にも何度か官途における挫折を経験して來た陸游だから、免職には人一倍苦い思いもあったろう。范にしても苦澁の決斷ではあったろうが、少なくともこの時點では二人の友情にかなりの波紋を投じることになったのではなからうか。

こうして罷免され役所仕事のくびきから解放された陸游の精神は、以後『世說新語』の世界への傾斜を一層強めて行く。免職直後に書かれた七律「小疾謝客」（劍南七）は

痴人未害看周易 痴人未だ害（そこな）わず 周易を見るを

名士須讀楚辭 名士 眞に須らく楚辭を讀むべし

と詠う。「名士」云々は、『世說新語』任誕篇に王孝伯（王恭）の言葉として、

名士不必須奇才。但使常得無事、痛飲酒、熟讀離騷、便可稱名士。

名士は必ずしも奇才を須いず。但だ常に事無きを得、酒を痛飲し、離騷を熟讀せしむれば、便ち名士と稱すべし。

とあるのによる。これは、この時陸游の置かれた状況そのものだった

に違ひない。また六月に書かれた七律「遣興」(劍南七)は詠う。

老子從來薄宦情 老子 從來 宦情薄し

不辭落魄錦官城 辭せず 錦官城に落魄するを

生前猶著幾兩屐 生前 猶お著けん 幾兩の屐

身後更須千載名 身後 更に須いんや 千載の名

「生前」「身後」の二句はやはり『世說新語』による。「一生の間にどれだけ下駄がはけることやら」と悠然とうそぶいた阮遙集(阮孚)。

「死後の名聲より、今この時の一杯の酒の方がいい」と言った張季鷹(張翰)。いずれも六朝貴族一流の世俗の名利を超越した精神を傳える逸話であり、こうした詩句からは當時の陸游の失意の大きさと同時に、重大な打撃を連観することで懸命に立ち直ろうとする意志が感じられる。しかしいかに現實を連観しようとして、生計は立てねばならぬ。

陸游が夔州での任期を終えた時に當時の丞相虞允文に送った「上虞丞相書」(渭南一三)には、次のようにある。

某行年四十有八。家世山陰、以貧悴逐祿于夔。其行也、故時交友醜縉錢以遺之。峽中俸薄、某食指以百數。臣受代不數月、行李蕭然、固不能歸。歸又無所得食、一日祿不繼、則無策矣。(中略)某而不爲窮、則是天下無窮人。

某行年四十有八、家世山陰なり。貧悴を以て祿を夔に逐う。其の行くや、故時の交友縉錢を遺して以て之に遣わす。峽中俸薄く、某食指百を以て數う。受代(官吏の交代)を距つること數月ならずして、行李蕭然とし、固より歸る能わず。歸るも又食を得る所無く、一日祿繼がざれば、則ち策無し。(中略)某にして窮と爲さざれば、則ち是れ天下に窮人無し。

これは四年前の狀況だが、免職後に書かれた七律「遣興」(劍南七)

の冒頭に「鶴料無多又掃空」(鶴料は官吏の俸給)と詠っていることを思えば、百人を超える大所帯を抱えての貧窮は相變わらずだったはずである。失職しても歸郷もままならぬ陸游は、

躬耕本是英雄事 躬耕 本より是れ英雄の事

老死南陽未必非 老いて南陽に死すとも未だ必ずしも非ならず

(劍南七「過野人家有感」)

と日頃尊敬する諸葛孔明にあやかり農耕に従事する意欲をも詠うが、實際にはそれだけで生計を維持することは不可能であり、不本意ながらも范成大の客分として援助を仰がざるを得なかつたろう。陸が范の幕府での地位を失つたことが直接の原因かどうかはわからないが、以後約半年の間、二人の交流は少なくとも詩文の上からは確認できなくなる。それを二人の絶交の證據と即断するのは危険だが、前述の狀況を考えれば、陸游にとって眞剣な暗中模索の時期だったには違ひない。一方范成大は着實にその行政手腕を發揮し、この六月には人民を苦しめていた過重な酒税の大幅な減免を實現している。

五

詩文の交流は疎遠になったものの、范成大はやはり友人として陸游のために心を砕いたと思われる。一時陸游を成都に近い嘉州の知事に任命する話を持ち上がるが、これは范成大が自分の権限を利用して陸游の生活の便宜を計つたものに相違ない。結局この任命は陸游のかつての知嘉州事代行時期の態度が「燕飲頽放」だったことを理由に九月になって取り消されるが、ほどなくして陸游は台州崇道觀の祠祿(寺社の管理を名目とする恩給)を受領する。九月に書かれた陸游の七律「蒙恩奉祠桐柏」(劍南七)は、そうした経緯を、

罪大初聞收郡印 罪大きくして初めて聞く 郡印を收むると

恩寛俄許領家山 恩寛くして俄かに許さる 家山を領するを

と詠う。「郡印」とは知嘉州事の印であり、「家山」と言うのは崇道觀

が陸游の故郷に近い天台山にあるためである。祠祿の受領は勅許を必

要とするが、これについても范成大が何らかの形で助力をしたと考え

るのが妥當であらう。

こうして職務は名目ばかりの恩給生活者となった陸游は、體制の實

質から完全に疎外されてある自分の悲劇的な立場を痛感しただらう。

しかし反面、役所での上下關係に束縛されない自由な身分となり、創

作のための條件が十分に確保されたことは、結果的にその詩人としての

成長を促したと言える。實際的な經濟問題が解決したこともおそら

く一因となつて、范陸の文學交流は、この秋に再び活況を呈する。初

秋に書かれた范成大の六首の七律に陸游が次韻して應じているが、こ

れらの詩が現在の『劍南詩稿』では「蒙恩奉祠桐柏」のすぐ後に續い

ていることを思えば、そこには陸の范に對する感謝と友情再確認の意

恩表示、つまり「仲直りのしるし」としての意味合いも含まれていそ

うである。應酬の詩のうち范の「新涼夜坐」とそれに對する陸の「和

范待制秋興」其一是、特によく知られる。

新涼夜坐 范成大

吏退焚香百慮空 吏退き 香を焚きて 百慮空し

靜聞虫響度簾櫳 靜かに聞く 虫響の簾櫳を度(わた)るを

江頭一尺稻花雨 江頭 一尺 稻花の雨

窓外三更蕉葉風 窓外 三更 蕉葉の風

日日老添明鏡裏 日日 老は添う 明鏡の裏

家家涼入短檠中 家家 涼は入る 短檠の中

成都における陸游と范成大の交流

簡編燈火平生事 簡編 燈火 平生の事

雪白昏昏奈此翁 雪白 昏昏 此の翁を奈んせん

和范待制秋興 其一 陸游

策策桐飄已半空 策策として桐飄り 已に半ば空し

啼螿漸覺近房櫳 啼螿 漸く覺ゆ 房櫳に近きを

一生不作牛衣泣 一生 作さず 牛衣の泣

萬事從渠馬耳風 萬事 渠(かれ)に従う 馬耳の風

名姓已甘黃紙外 名姓 已に甘んず 黃紙の外

光陰全付綠樽中 光陰 全く付す 綠樽の中

門前剝啄誰相覓 門前 剝啄として誰か相覓むる

賀我今年號放翁 我の今年放翁と號するを賀するなり

儀禮的な應酬のための唱和は、純粹な内的動機に觸發されて書く詩

に比べ、文學作品としての達成度はあまり高くない場合が多い。しか

しこの二首はその稀な例の一つであり、しかも陸游は范成大の設定し

た土俵の上で范以上に伸びやかに自己の心境を語っているのが注目さ

れる。二人ともすでに五十歳を過ぎ、共通して老いの感慨のあるのは

自然である。陸游は「萬事從渠馬耳風」と詠うが、その身邊には、相

變わらず非難や嘲笑の言葉が渦巻いていたのだらうか。だがそれは、

主和を國是とする當時の政情の下で主戦の信念を貫く者の甘受すべき

宿命であった。「名姓已甘黃紙外、光陰全付綠樽中」の二句は、自分

の出世に完全に見切りをつけ、悠々自適の晩年を過ごそうという靜か

な決意を詠う。この詩は有名な「放翁」の號の初出だが、陸游がこの

聞き直りとも言うべき號を使うに至ったについては、免職以來の大き

な精神的葛藤と、そこからの解脱の過程を考慮すべきだらう。南鄭か

此身合是詩人未 此の身合に是れ詩人たるべきや未だしや
細雨騎驢入劍門 細雨 驢に騎りて劍門に入る

(劍南三「劍門道中遇微雨」)

と詠い、驢馬の背で冷たい冬の雨に濡れつつ詩人として生きる運命を覺悟した陸游は、この半年の経験で一層そうあるべき確信を強めたのではなからうか。そして自分が體制から疎外されるだけ、順調に官途を歩んでいく友人への期待は大きくならざるを得ない。九月一日付で陸游は「籌邊樓記」(渭南一八)を書いていくが、その中で范がかつて金朝への使者の重任を立派に果たし、北方の地理・儀禮・法律・制度などに精通していることを、劍南節度使として成都を治めた晩唐の李德裕に言及しつつ賞賛している。そこからは、范成大が有事の際に重任に堪え得る人材であるとの陸游の期待を読み取ることができよう。

なおこの秋の全般的傾向として、二人の作品に郷愁が色濃くにじみ出ていることを特筆したい。二人とも故郷を離れて以來四、五年の歲月を経ているから、歸郷の思いが切實なのは當然と言えらるう。たとえば范成大が望郷の思いを詠った「有懷石湖舊隱」に和した「和范待制月夜有感」の中で、陸游は

醉思蓴菜黏篙滑 醉いて思ふ 蓴菜の篙に黏(ねば)りて滑らかなるを
饑憶鱸魚墜釣肥 饑(むさば)り憶う 鱸魚の釣に墜ちて肥えたるを

と詠っている。「蓴菜」「鱸魚」の語はやはり『世説新語』に典故があり、洛陽で仕官していたが、秋風が吹く頃に故郷の名物の蓴菜のスーブと鱸魚のなますを思い出し、官を辭して歸郷したという有名な張翰の故事による。淳熙三年は、どうやら陸游の「世説新語の年」と言え

そうである。また陸游の『老學庵筆記』巻五には次のような興味深い記事が見えるので、併せて紹介しておこう。

范至能在成都、嘗求亭名于予。予曰、「思鱸」。至能大以爲佳。時方作墨、即以銘墨背。然不果築亭也。

范至能成都に在り、嘗て亭の名を予に求む。予曰く、「思鱸」と。至能大いに以て佳と爲す。時に方に墨を作り、即ち以て墨背に銘ず。然れども亭を築くを果たさざるなり。

結局「思鱸亭」は建てられなかったわけだが、その名稱は當時の二人の心境をびたりと言ひ當てるものだったに違いない。早く入蜀の際に、陸游は巴東(湖北省巴東縣)で寇準ゆかりの「秋風亭」を訪れ、亭の名前に深く感慨を催したことを記しているから、張翰の故事には格別の思い入れがあったのだから。『老學庵筆記』の逸話がいつの出来事かは定かでないが、淳熙三年秋の陸游の詩句には張翰の典故がしばしば見えるから、やはり同じ秋のことではないかと思われる。

六

秋の唱和が一段落して、この年の冬には交流の記録として現存する作品はない。陸游にとつて、冬は休息と沈潜そして自己回復の好機だったようである。年が明けて淳熙四年(一一七七)の正月には、枯淡の境地とも言うべき秋の唱和から一轉して、陸游の愛國詩の代表作として名高い「關山月」をはじめ、「出塞曲」「戰城南」(以上劍南八)など骨太で雄渾な筆致の樂府詩があいついで書かれている。濃厚な友人との風雅な一時が心の慰めだったにせよ、陸游の心情はあくまでも「中原北望氣如山」(劍南一七「書憤」)だったのである。「關山月」の冒頭は詠う。

和戎詔下十五年 和戎の詔下りてより十五年

將軍不戰空臨邊 將軍 戰わずして空しく邊に臨む

朱門沈沈按歌舞 朱門 沈沈として歌舞を按じ

厩馬肥死弓斷弦 厩馬 肥えて死に 弓 弦を斷つ

隆興の和議の體制が一貫して維持される中で、平和の代償として毎年敵國に支拂われる巨額の獻上金、それを捻出するために農民に課される苛酷な重税と、南宋の社會は一面で深刻な矛盾を抱えていた。そうした状況を目の當たりしながら何もなし得ない自身に對する苛立ちと、表面だけの太平の下で華美な酒宴に明け暮れる爲政者たちへの批判のまなざしが、この詩には感じられる。また同じ頃に書かれた七絶「讀書」其二（劍南八）は、次のように詠う。

歸老寧無五畝園 歸老すれば 寧んぞ五畝の園無からん

讀書本意在元元 讀書の本意は元元に在り

燈前目力雖非昔 燈前の目力 昔に非ずと雖も

猶課蠅頭二萬言 猶お課す蠅頭二萬言

陸游は、この時小型版の『資治通鑑』を讀んでいたという。前年の『世説新語』への耽溺を思えば、「讀書の目的は人民の救済にこそある」と知識人としての使命感を熱く詠うこの詩は、陸游の精神がここへ來てようやく免職後の意氣消沈から脱却したことを物語るものと言える。

陸游の氣力の充實とは對照的に、この春范成大は大病を患い、長期にわたり病床にあつた。病名は定かでないが、范はもともと頑健な體質でない上、赴任の長旅や幕府での激務による疲労が徐々に蓄積し、ここに來てそれまでの緊張が一氣に崩れてしまったのだらう。前年秋に書かれた范の七絶「秋老、四境雨已沛然……」には「秋來病骨」の語

成都における陸游と范成大の交流

が見えるからこの頃から體調がすぐれなかつたようだが、『吳船錄』の六月壬申の日の項には、

今春病少城、幾殆。僅得更生。

今春少城（成都の西城）に病み、幾んど殆し。僅かに更に生くるを得たり。

とあり、病氣は命にかかわるほどのものだったらしい。『石湖居士詩集』卷一七では七律「丁酉正月二日東郊故事」の次にすぐ七律「二月二十七日病後始能扶頭」が續き、日付を見る限り二カ月近い作詩の空白がある。おそらく范成大は病氣はこの間の出來事であり、「二月二十七日……」と同じ頃に書かれたと思われる七律「病中聞西園新花已茂……」に「三句高臥信音疎」の句があるから、少なくとも一カ月は病床にあつたと考えられる。そして二月の下旬から病氣は次第に快方に向かつたのだらう。大病が歸郷の思いを一層つのらせた見え、この時期の范成大の詩は全體として沈鬱な情緒に支配されている。今度は范の精神の危機を陸が支える番だった。この春には、范成大の病中病後の七律三首に陸游が次韻して應じている。またこの春から范成大の詩題に「陸務觀」の名が散見されるようになるが、これは范の陸に對する精神的依存の度合いが次第に大きくなって行ったことを物語るのだらう。一例として范の詩集には、

陸務觀云、「春初多雨、近方晴。碧鳴坊海棠、全未及去年」。

陸務觀云、「春初雨多く、近く方めて晴れたり。碧鷄坊の海棠、

全て未だ去年に及ばず」と。

と題する七絶二首がある（石湖一七）。病氣で出歩くことのできない范成大が、氣になる海棠の花の消息を見舞いに訪れた陸游に尋ねた情景を彷彿とさせる。范にとってこうした陸との他愛のない雑談は、大き

な慰安だったのだろう。この時期は、二人の氣持が對等の友人同士として最も接近していた、成都における交流の圓熟期と言えるかも知れない。この春には、陸游が冬の終わり頃に書いた七言古詩「春愁」(劍南八)に對して范成大が「陸務觀作『春愁曲』悲甚、作詩反之」(石湖一七)を書いて反駁している。これは次韻の詩ではなく、また内容も憂愁を主題とした幾分遊戯的な應酬だが、現存する詩の中で始めて范成大から陸游に應じたケースとして注目される。

しかし陸游はただおさなりに范成大に調子を合わせていたわけではなく、時には精神的に惰弱になっている范成大を叱咤激勵することもあった。たとえば范が、

摧頽豈是功名具 摧頽 豈に是れ功名具(そな) わらん
燒藥廬邊過此生 廬邊に藥を燒きて 此の生を過ごさん (枕上)

と太守らしくもない氣弱な言葉をもたらしたのに對し、陸は、

關隴宿兵胡未滅 關隴の宿兵 胡 未だ滅せず
祝公垂意在尊生 祝す 公の意を垂るるは生を尊ぶに在らんこ
とを (和范舍人病後二詩「其一」)

と詠い、「どうか油断せずに人民のための政治をなさってください」と強い調子で應じている。病み上がりの范に對してかなり手厳しい言葉と感じられるが、これは一面では、そうした耳に痛い忠告ができるくらい二人の關係が成熟していたということでもある。それに實際この頃の范成大には、精神のたがが緩んでやや度を過ぎた贅澤に走る傾向があったと思われる。たとえば、陸游が淳熙五年に書いた「天彭牡丹譜」(滄南四二)には、この春范成大が蜀の牡丹の名所である天彭から牡丹數百を早馬で取り寄せ、酒宴に供したことが記されてい

る。また四月己卯付けで陸游は「銅壺閣記」(滄南一八)を書いているが、その中で「立派な樓閣の建築もさることながら、失地回復の壮志を忘れぬように」と重ねて范に呼びかけている。錢仲聯氏は、

蓋成大以詩人而爲邊帥、殲虜之雄心、有未足也。
蓋し成大詩人を以て邊帥と爲り、殲虜の雄心、未だ足らざる有りなり。

と述べているが、のみならず范成大が相次ぐ壮大な土木建築によって民力を疲弊させていることへの懸念も、陸游の心中にあったのではなからうか。

七

歸郷を切望し、祠祿受領の許可が臨安から届くのを待ちわびていた范成大だが、ついに蜀を去る日がやって来た。二月に胡元質が范の後任に任命され、四月には范の歸還を命じる詔が成都に届く。『吳船錄』によれば、五月二十九日に范成大と陸游ら見送りの一行は成都を出發し、それから十日餘りを経て眉州(四川省眉山縣)の南六十里の中巖に至っている。送別の道中は、二人の應酬の最後のピークである。この時書かれた數々の送別詩において、范成大の精神は春の沈鬱な情緒とは對照的に異様なまでのテンションの高まりを見せる。中巖の慈姥巖で二人は別れの時を迎えるが、この時范成大は七律「玻璃江一首 戲效陸務觀作」(石湖一八)を書き、陸游の作風の意識的な模倣に託して惜別の情を表現している。

玻璃江頭春淥深 玻璃江頭 春淥深し
別時云流到今 別れの時 云流として流れて今に到る
祇言日遠易排遣 祇だ言う 日に遠くして排遣し易しと

不道相思翻苦心 道わず 相思いて苦心を翻すと

鳥頭可白我可去 鳥頭 白かるべく 我は去るべし

萑花易青君易尋 萑花 青かり易く 君は尋ね易し

人生若未離別 人生 若し未だ離別を免れずんば

不如碌碌無知音 如かず 碌碌として知音無きに

この詩がどれだけ陸游の作風に迫り得ているかは議論の餘地もあるが、これを見る限り、范成大は眞率な感情表現にこそ陸游の詩の基本的特徴があると考えていたようである。ともあれ作風の模倣は、その対象である相手への親愛を表現するものには違いない。詩題で「戯れに」と言うのは言葉のあやで、實は范自身の平靜な作風を突破しなければ、この時の高ぶる気持ちを表現し得なかつたのかも知れない。また同じ時の別の詩題（石湖一八）には、次のようにある。

余與陸務觀自聖政所分袂、每別輒五年、離合又常以六月、似有數者。中巖送別、至揮淚失聲。留此爲贈。

余と陸務觀と聖政所にて袂を分かちてより、別れる毎に輒ち五年、離合又常に六月を以てし、數有る者のごとし。中巖にて送別し、涙を揮い聲を失うに至る。此を留めて贈と爲す。

臨安の聖政所で范が陸を見送つたのは、隆興元年六月である。その七年後の乾道六年六月に二人は鎮江で再會。更に五年後の淳熙二年六月に成都で再會し、今また六月に新たな別れの時を迎えようとしている。この言葉は、范成大が陸游との交流を一續きの線として把握していたこと、そして離合の規則性に不思議な因縁を感じていたこと、それだけ陸游を親しい友人として意識していたことを物語るだろう。五十翁が「揮淚失聲」というのだから、ただ事ではない。

別れに際し、陸游は二十句から成る七言古詩「送范舍人還朝」（劍

成都における陸游と范成大の交流

南八）を范成大に贈っている。これは單なる送別詩ではなく、中央歸還後の范に對する多大な政治上の期待を表明したもので、前掲「錦亭」と照應して、成都における二人の交流の首尾を飾るにふさわしい力作と言えよう。次はその末尾である。

公歸上前勉劉策 公 上前に歸らば 劉策に勉めよ

先取關中次河北 先ず關中を取り 次には河北

堯舜尙不百有蠻 堯舜すら 尙お百蠻を有せず

此賊何能穴中國 此の賊 何ぞ能く中國に穴せんや

黃扉甘泉多故人 黃扉 甘泉 故人多し

定知不作白頭新 定めて知る 白頭の新作さざらんと

因公併寄千萬意 公に因りて併せて寄す 千萬の意

早爲神州清虜塵 早くに神州の爲に虜塵を清めよ

この詩は陸游の愛國詩の一代代表作としてよく選集などに採られているので、突き詰めた表現の持つ迫力はかえって見過ごされがちだが、同じ道中で書かれた他の送別詩と比較する時、その内容・情緒がきわめて突出していることは、一目瞭然である。成都で陸游が范成大に贈つた詩全體の中でも、これほど露骨に自己の政治主張を述べたものは他にない。この詩は、別れの感傷にひたっていた范の心に一場の波亂を呼び起こしたことだろう。范成大は陸游との應酬において、政治向きの發言は極力控えている。陸游も、范の責任ある立場を思い、普段はそうした姿勢に讓歩を示していたに違いない。しかし今は、頼むに足る友人にじかに自分の「千萬の意」を訴え得る最後のチャンスなのである。この時陸游の精神もまた、極度に高揚していたとせねばなるまい。陸游と別れた范成大はゆっくり長江を下り、十月三日に蘇州の盤門に到着する。歸途の船旅の記録『吳船錄』は、陸游の『入蜀記』

と並んで宋代紀行文の雙壁とされる。范は翌淳熙五年（一一七八）四月には副宰相にあたる參知政事に任命されるが、御史の彈劾を受けてわずか二カ月で辭任・歸郷している。陸游は同じ春に孝宗の詔により都に召還され、成都を離れている。

結 び

南鄭での夢が破れ、詩人として生きる覺悟をした陸游にとつて、自己とは異質な個性を持つ大詩人范成大との成都における親密な交流は、その詩人としての成長に大きな影響を及ぼしたと考えられる。その意味で、成都時代は南鄭時代と共に陸游の人生に重要な意義を持つ時期だったと言えよう。しかし詩人としての成熟は、政治上の抱負實現の道が閉ざされたことの自覺と表裏一體の關係にあった。それゆえ陸游は、順調に官途を歩んでいる范成大に自己の悲願實現のために一層の期待をかけることになる。范成大は重責ある太守としての立場から政治的には陸游に安易に同調し得なかったが、その心情に一定の理解を示し、詩文の友として陸游を尊重した。二人は、それぞれの故郷を遠く離れた異郷にあって、時には相互に依存しつつ友情の絆を強めて行ったと總括できる。

陸游を「愛國詩人」としての見地から論ずる場合、成都での范成大との交流は、陸游の主戰論を友誼によって封殺したものととして、必ずしも好意的評價が與えられていない。しかし一定の起伏はあったにせよ、二人の間の精神的紐帶はやはり友情と呼ぶにふさわしいものであり、それを過小評價することはできない。ただ友情は本來對等の關係の上に成り立つものだが、實際は二人の地位に大きな隔たりがあったため、その表現は一定の屈折・偏向を帯びざるを得なかったのである。

離蜀の後、二人は二度と成都時代のような親密な交際を持つことはなかったが、それは友情の完全な途絶を意味しない。范成大死去の二年後の慶元元年（一一九五）秋、亡友追悼のために陸游は五律「范參政挽詞」二首（劍南三三）を書いてゐるが、其の冒頭で、

孤拙知心少 孤拙 知心少く
平生僅數公 平生 僅かに數公のみ

と詠っている。實に陸游にとつて范成大は、「孤」にして「拙」なるおのれを理解し得る貴重な存在だったのである。成都での范成大との交流は、蜀地における記念すべき思い出の一つとして陸游の胸に生き續けていたと言えよう。

注

(1) 以下「劍南詩稿」は「劍南」、「石湖居士詩集」は「石湖」、「渭南文集」は「渭南」と略稱する。「劍南詩稿」は錢仲聯『劍南詩稿校注』（一九八五年九月上海古籍出版社）、「石湖居士詩集」は周汝昌『范石湖集』（一九八一年八月上海古籍出版社）による。「渭南文集」は台灣中華書局の四部備要本『陸放翁全集』により、「陸游集」（一九七六年一月中華書局）を参照した。なお引用した陸游詩の製作時期は、すべて「劍南詩稿校注」の題解による。

(2) 『宋史』孝宗紀二（乾道六年閏月）戊子、遣范成大等使金求陵寢地、且請定受書禮。

(3) 『入蜀記』六月二十八日／奉使金國起居郎范至能至山、遣人相招食於玉鑑堂。至能名成大、聖政所同官、相別八年。今借資政殿大學士提舉萬壽觀侍讀、爲金國祈請使云。

(4) 周必大「資政殿大學士贈銀青光祿大夫范公神道碑」／淳熙元年十月、除敷文閣待制、四川制置使、知成都府。

(5) 當時、使職に任命された者は私的な人間關係によって自分の幕府を編

成する権限が與えられていたことは、村上哲見『圓熟詩人陸游』(一九八三年六月集英社)第六章「范成大との交遊」に詳しい。

(6) 歐小牧『愛國詩人陸游』(一九五七年四月古典文學出版社)第二章參照。

(7) 初出一九六二年『中國文學報』第一七冊。前野直彬「春草考」(一九九四年二月秋山書店)所收。

(8) 『新唐書』杜甫傳／流落劍南、結廬成都西郭。(中略)會嚴武節度劍南東西川、往依焉。武再帥劍南、表爲參謀檢校工部員外郎。武以世舊、待甫甚善、親入其家。甫見之、或時不巾。而性褊躁傲誕、嘗醉登武妝、瞪視曰、「嚴挺之乃有此兒」。武亦暴猛、外若不爲忤、中銜之。

(9) とは言え、陸游の七言古詩「讀杜詩」(劍南三三)には「熟視嚴武名挺之」とあり、陸游が前掲注8の『新唐書』の逸話を知っていたことは間違いない。

(10) 『新唐書』杜甫傳は前掲注8の部分に續けて、嚴武が兵士を集めて杜甫を殺そうとしたことを記している。しかしこの部分は『舊唐書』にはなく、小川環樹氏は、杜甫が一時期韋臯の保護を受けていたことから生まれた傳説とする。(一九七五年一月大修館 小川環樹「唐代の詩人」その傳記」二四〇頁參照)。

(11) 陸游「范待制詩集序」／成都地大人衆、事已十倍他鎮。而四道大抵皆帶蠻夷、且北控秦隴。所以臨制捍防、一失其宜、皆足致變、故於呼吸顧盼之間。以是幕府率窮日夜力理文書、應其會。而故時巨公大人、亦或不得少休。

(12) 周必大「范公神道碑」／公日夜閱士、製器甲、督邊郡、次第行之。(中略)凡人才可用者、公悉羅致幕下、用其所長、不以小節拘之。

(13) 陸游「范待制詩集序」／及公之至也、定規模、信命令。弛利惠農、選將治兵。未數月、聲震四境。歲復大登、幕府益無事。

(14) 『詞林紀事』一一／范致能爲蜀帥、務觀在幕府、主賓唱酬、短篇大章、成都における陸游と范成大的交流

人爭傳誦之。

(15) 陸游「夢范參政」(劍南三〇)／酒肉如山鼓吹喧、車馬結束有行色。

(16) 入谷仙介『宋詩選』下(一九七九年二月朝日新聞社)「錦亭」の解説參照。

(17) 范成大は數文閣待制で從四品、陸游は朝奉郎で正七品。(『宋史』職官志八による)。

(18) 『世說新語』黜免／鉅鹿孟敏、字叔達。(中略)嘗至市買甌、何擔墮地壞之、徑去不顧。適遇林宗、見而異之、因問曰、「壞甌可惜、何以不顧」。客曰、「甌既已破、視之何益」。

(19) 『晉書』鄧遐傳／遐字應遠。勇力絕人、氣蓋當時、時人方之樊噲。桓溫以爲參軍、數從溫征伐。(中略)枋頭之役、溫既懷恥忿、且忌憚遐之勇果、因免遐官、尋卒。

(20) 『晉書』傅咸傳／生子痴、了官事。官事未易了也。了事正作痴、復爲快耳。

(21) 『世說新語』雅量／或有詣阮、見自吹火蠶屨、因歎曰、「未知一生當著幾量屨。神色閑暢。また同任誕／張季鷹縱任不拘、時人號爲「江東步兵」。或謂之曰、「卿乃可縱適一時、獨不爲身後名邪」。答曰、「使我有身後名、不如即時一杯酒」。

(22) 『宋史』孝宗紀一／(淳熙三年)六月乙酉、減四川酒課四十七萬餘緡。

(23) 『宋會要』職官・黜降官九／(淳熙三年)九月、新知楚州胡與可、新知嘉州陸游、并罷新命。(中略)游攝嘉州、燕飲頗放故也。

(24) 錢大昕の「陸放翁先生年譜」を踏襲し、この年六月に陸游が祠祿を受けたとする年譜が多いが、筆者はこの説に疑義を有する。ここでは祠祿受領を九月とする歐小牧「陸游年譜」(一九八一年七月人民文學出版社)に従って陸游の經歷を記述する。

(25) 范の「新涼夜坐」「立秋月夜」「前堂觀月」に對して陸が「和范待制秋興」三首を、范の「秋雨快晴、靜勝堂席上」「秋老、四境雨已沛然、晚

坐籌邊樓、方議祈晴、樓下忽有東界農民數十人、訴山田却要雨、須長吏致禱、感之作詩」に對して陸が「和范待制秋日書懷二首、游自七月病起蔬食止酒、故詩中及之」を、范の「有懷石湖舊隱」に對して陸が「和范待制月夜有感」を、それぞれ書いている。

(26) 『世說新語』識鑑／張季鷹辟齊王東曹掾、在洛。見秋風起、因思吳中菰菜羹・鱸魚膾、曰、「人生貴得適意爾。何能羈宦數千里以要名爵」。遂命駕便歸。俄而齊王敗、時人皆謂爲見機。

(27) 『入蜀記』十月二十一日／調寇萊公祀堂、登秋風亭、下臨江山。是日重陰微雪、天氣飄飄。復觀亭名、使人悵然、始有流落天涯之歎。

(28) 鱸魚の典故は、この他「和范待制秋日書懷二首」其一や「雙頭蓮呈范至能待制」などにも見える。

(29) 周必大「范公神道碑」／(淳熙)三年春、公大病、求歸。

(30) 范の「二月二十七日病後始能扶頓」に對して陸が「和范舍人書懷」を、范の「枕上」病中聞西園新花已茂、及竹逕皆成而海棠亦未過」に對して陸が「和范舍人病後二詩、末章兼呈張正字」を、それぞれ書いている。

(31) 「陸務觀」の名を含む詩題は、『石湖居士詩集』卷一七に二つ(計三首)、卷一八に四つ(計七首)ある。

(32) 陸游「天彭牡丹譜」風俗記第三／淳熙丁酉歲、成都帥以善價私售於花戶、得數百苞、馳騎取之。至成都、露未晞、其大徑尺。夜宴西樓下、燭焰與花相映發、影搖酒中、繁麗動人。

(33) 陸游「銅壺閣記」／方園之成也、公大合樂與賓佐落之。客或舉觴壽公曰、「天子神聖英武、蕩清中原。公且以廊廟之重、出撫成師。北舉燕趙、西略司并、挽天河之水、以洗五六十餘年腥羶之汚。登高大會、燕勞將士。勒銘奏凱、傳示無極。則今日之事、蓋未足道」。

(34) 『劍南詩稿校注』卷八「和范舍人病後二詩……」其一の注釋參照。

(35) 『吳船錄』卷上／石湖居士、以淳熙丁酉歲五月二十九日戊辰、離成都。

(中略) 壬午、發眉州。六十里、午至中巖。

(36) この時陸の七絶「新津小宴之明日、欲遊修覺寺、以雨不果。呈范舍人」二首に對して范が「次韻陸務觀編修新津遇雨、不得登修覺山、徑過眉州三絶」(其二のみ陸の原詩散逸)を、范の七言古詩「崇德廟」に對して陸が「和范舍人永康青城道中作」をそれぞれ書いている。また范には七絶「次韻陸務觀慈姥巖酌別二絶」があるが、これに對應する陸の原詩は現存しない。

(37) 『吳船錄』卷上／(六月)癸未。早食後、與送客出寺。至慈姥巖前徘徊、皆不忍分袂、復班荆小飲巖下。(中略)諸賓客各即席作詩、不覺日暮。遂皆不成行、下山復入宿寺中。甲申。早出山至江步、與送客先歸者別。

(38) 于北山『陸游年譜』(一九八五年一月上海古籍出版社)二一八頁／所可注意者、成大在蜀期間、與務觀倡酬之作、只着重私人情誼、絕不涉及國事、尤諱言抗金問題、與務觀詩意頗相鑿柄。

(39) 齊治平『陸游』(一九七八年九月上海古籍出版社)第四章「成都幕府」／陸游主張隨時作着軍事準備、一有機會、就要北伐。而范成大的態度則是雍容坐鎮、不求有功、但求無過。(中略)這種矛盾、被兩人的友誼掩蓋了起來、范成大對他總還是很客氣、很優待。

(40) 離別後の陸游の作品に、「月夕睡起獨吟、有懷建康參政」、「次韻范參政書懷」十首、「夜讀范至能攬轡錄、言中原父老見使者多揮涕、感其事作絕句」、「夢范參政」、「范參政挽詞」二首、「六月二十四日夜分、夢范至能・李知幾・尤延之同集江亭、諸公請予賦詩、記江湖之樂、詩成而覺、忘數字而已」がある。一方范には、詩題で直接陸に言及する作品は見られない。離別後の范陸の交流については、稿を改めて論じたい。